ハンス・フィッシャーさく／え

『たんじょうび』をめぐって

高原　典子

誕生日のうれしさは二種類あります。自分の誕生日を祝ってもらううれしさと大好きな人の誕生日を祝ってあげるうれしさ。その両方の喜びをみごとに表現しているのがハンス・フィッシャーの『たんじょうび』です。フィッシャーは見返しの絵からお話に至るまで、ほね惜しみせずに子どもの気持ちに寄りそった作品を描き上げ、それを『こねこのぴっち』につなげました。

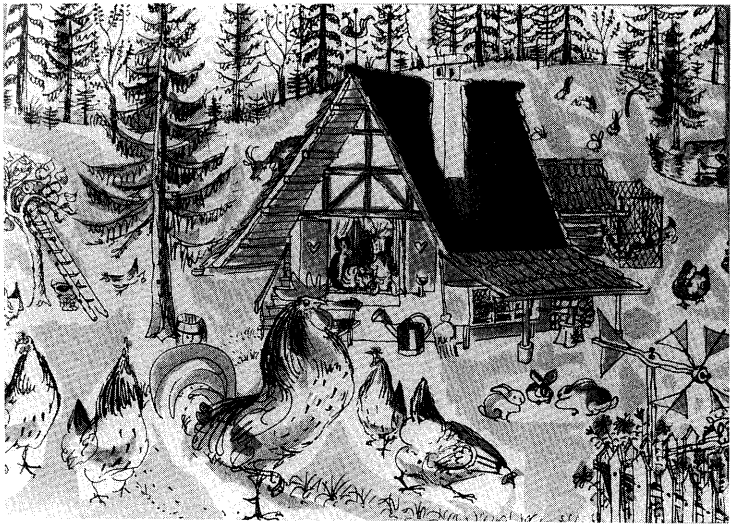
○包帯

お話はリゼッテおばあちゃんの家を舞台として展開します。おばあちゃんは森のそばの野原にある家で、おんどりやめんどり、あひる、うさぎ、やぎなど二十六匹の動物たちを自分の子どものようにかわいがって暮らしていました。とりわけ、だいじにされていたのは、ねこのマウリとルリ、そして、犬のベロ。最初の場面（図版1）では、その動物たちが半ページの画面いっぱいに紹介されます。遠景のうさぎなどは一筆描きといってもいいくらいにデフォルメされていますが、無駄なく確実に

その動物らしい動きを表現するみごとさ！　フィッシャーはまさに「線描の魔術師」といえましょう。そして大地の黄色は、動物たちの生活がいかにのどかで満ち足りたものかというその「幸福感」を象徴する色彩としての輝きを放っています。

さて、ある日、おばあちゃんは村へ買物に出かけます。三匹に、しっかり留守番するように、と言い聞かせて出かけるのですが、二匹のねこはすぐに台所に飛びこんで、おいしいものを捜し始めます。それを止めるのがベロ。ベロはその日がおばあちゃんの七十六歳の誕生日だということをちゃんと覚えていて、お祝いしてあげようと二匹にもちかけるのです。

実は、ベロは少し前に斧で木を割る手伝いをしていて、左前足にけがをし、おばあちゃんに介抱してもらったのです。病人やけが人にとって、やさしく看護し手当てしてくれる人は特別な存在です。その痛みを理解し、普段だったら許されない甘えも許容してくれそうな人。看護する人とされる人はしっかりと向かい合い、必要に



◀図版1　『たんじょうび』（福音館）より

▶図版2　『たんじょうび』より

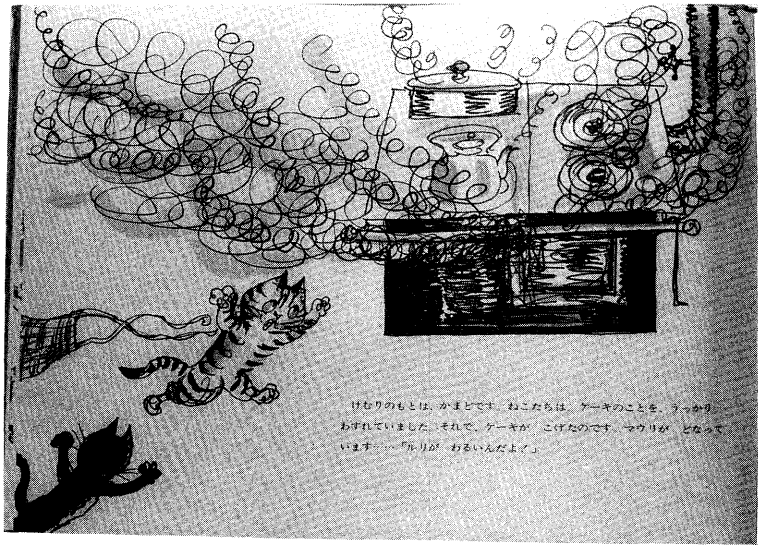
応じて閉鎖的な関係さえ築き上げます。ですから幸か不幸か、病気の子どもは看護してくれるおかあさんを独占することもできるのです。ベロが包帯を巻いてもらっているページ（図版2）も、この絵本の中で唯一、おばあちゃんとの「二人だけ」が親密に描かれています。でも、ベロはおばあちゃんに手当てしてもらって、そのやさしさに酔いしれようというのではありません。包帯はおばあちゃんのベロへの愛情の徴でもあるのですから、今度はベロがおばあちゃんを喜ばせてあげたいと思うのです。

○らせん形と斜線

さて、ベロの相談を受けて、二匹のねこはおばあちゃんにケーキを焼いてあげようと考えます。でも、ちらかった台所を見ると、これから何か一騒動起きそうだという予感がしないでもありません。

ベロは他の動物たちにも相談します。ところがみんなが集まっても、ベロはめんどりのおしゃべりに悩まされ

たり、やぎに話の腰を折られたりして、なかなか話の本題――おばあちゃんのバースデーパーティーに向けての役割分担――に入れません。昔話だったら、お話のプロットがもっとすっきりと展開することでしょうが、すんなりと先に進まないのがこの絵本の特色であり、又おもしろいところでもあります。つまりお話がすぐに展開しないというのは、それだけ登場人物が思い思いに自己主張し、自分らしく生きているからなのです。各自の動きが目的のために切り捨てられることなく、いたずらも許容されるので、お話が整然と進行せず。寄り道を余儀なくされます。その喧噪が何とも子どもの気持ちに即していて、現実味豊かなのです。それもそのはず、この絵本はフィッシャーが我が子のために、そのアドバイスを受けながら描いた作品なのですから。ベッティーナ・ヒューリマンは『子どもの本の世界』の中で、「ハンス・フィッシャーは……まるでダンサーがステップを踏むようにぐるぐると円を描いたり、うねうねと波形を描いたり、らせん形を描いたりしてすばやくたのしげにいた



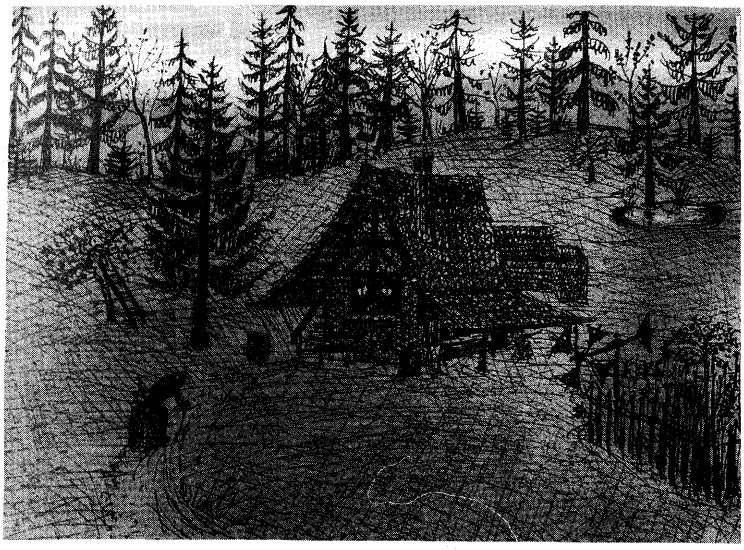
◀図版3　『たんじょうび』より

ずらを重ねていく。」と書いていますが、この本は絵だけではなく、お話の方もらせん状に展開していくのです。

さて、やっとベロの話を聞き終えた動物たちは、おばあちゃんのバースデーパーティーのために行動を開始します。うさぎは蠟燭を買いに行き、めんどりは卵を産み、おんどりはりんごをとり、やぎは花を摘みます。ところが、そのとき又、ハプニングが！　家の中からモウモウと煙があがり、こげ臭い匂いが流れてくるのです。みんな、あわてて走ってきます。ベロなどあまり夢中になって走ったので、包帯は解け、傷の痛みも忘れてしまったほどです。煙の源はかまどの中でした。ねこたちがうっかり忘れてしまったので、ケーキが焦げたのです。それにしてもこの煙のすごいことといったら！（図版3）フィッシャーはこのときとばかりに、思いきりらせん形を使います。

らせん形というのは、戻りつつグルリと寄り道をしながら前進する線で、バージニア・リー・バートンの『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』や山本忠敬の『のろまなローラー』の描くS字形よりずっとメチャクチャなイメージがあります。S字形は自分らしくまわり道をしていくイメージを持っていますが、らせん形はたつまきや旋風の動き、ちょうど少しもじっとしていない子どもがはしゃぐときの動きとよく似ているのです。絵の中にらせん形が描かれているとき、お話もらせん状に展開しないはずはありません。このときも、ねこたちはまっ黒に焦げたケーキの上にさとうをまぶし、子どもらしい発想でみごとに焦げをカモフラージュしてしまいます。こうして絵のらせん形とお話のらせん型は互いに呼応し合いながら展開し、絵本全体を形づくっていくのです。

さて、夕方になると、留守番をしている動物たちのことを心配しながら、おばあちゃんが帰ってきます。（図版4）ここはこの絵本の中で唯一、静寂に包まれている大変印象的な場面です。もちろんらせん形は一本も使われていません。年老いたおばあちゃんの動きは、夜の闇のように静かな斜線に象徴されています。



◀図版4　『たんじょうび』より

ところがページを繰ったとたん、前ページとは打って変わった場面が展開します。そこには闇と光、不安と喜び、静寂と喧噪の対比が待ち受けています。（ページを繰るという楽しみは、まさにこのような意外性のためにあるのでしょう。）お祝いの食卓が用意されているのです。（図版5）これほどすばらしい食卓があるでしょうか。昼間、みんなで用意した品々がテーブルの上に勢ぞろいし、動物たちは一匹残らず席について、相変わらず思い思いの姿でおばあちゃんに「おめでとう」をいうのです。このとき、おばあちゃんがどんなに驚き、どんなに喜ぶか！　それは文章からも絵からも読みとれます。そして心のこもったユニークなお祝いは、未だ未だたっぷりと続くのです。

○プレゼントと想像力

さて、リゼッテおばあちゃんの誕生日がこんなに心をこめて盛大に祝えたのは、誕生日という機会に、やさしいおばあちゃんを何とか喜ばせたいという二十六匹それ

▲図版5　『たんじょうび』より

ぞれの熱意がこもっていたからにちがいありません。二十六匹分の知恵と力の結晶ともいえます。このお祝いの素晴らしさは、おばあちゃんが知らない間に周囲のみんなだけで考え、相談し創り上げたところにあるのです。つまり誕生日というのは、それを迎えるすべての人に成長をもたらすのかもしれません。一つ年齢を重ねる当事者はもちろん、それ以上に、他の人の誕生日を祝ってあげようとする子どもの成長は明らかです。

その姿がマージョリー・フラックの『おかあさんのたんじょう日』やシャーロット・ゾロトウ作・モーリス・センダック絵の『うさぎさんてつだってほしいの』などによく表現されています。これらの絵本の特色は、幼い主人公がおかあさんへの誕生祝を自分で決めかねて、人に相談するところにあります。つまりそれだけ幼い子にとって、何かを選び、決定するというのは、むずかしいということなのでしょう。ましておかあさんへのプレゼントとなると、いつもなら最良の相談相手であるおかあさんに相談できないわけですから、なかなかの難題なの

です。でも『おかあさんのたんじょう日』でダニー坊やが次々に動物に相談し、最後にくまのアドバイスを受け容れるのも、『うさぎさんてつだってほしいの』で女の子がうさぎの力を借りて、プレゼントの果実を集めるのも、幼い子どもが一人で何かを決めていくときの内面的な自問自答のプロセスを外面化したものかもしれません。あるいは、想像力の発達過程とも考えられます。ですから、もし私がダニーや女の子の母親だったら、物質としてのプレゼントそのものより、さまざまな内的過程を経て想像力を身につけ、自己決定できるようになったこと、そのことを何よりうれしいプレゼントと思うでしょう。

誕生日をめぐる絵本を読んでいると、「想像力」を豊かにするのは決してむずかしいことではないという気がします。まず大好きな人の誕生日にその人の喜びそうなお祝いを考えること。そんなところから始められそうに思うのですが、いかがでしょうか。

○ハンス・フィッシャーさく／え・おおつかゆうぞう訳
『たんじょうび』（福音館）
○マージョリー・フラックさく／え・みつよしなつや訳
『おかあさんだいすき』より『おかあさんのたんじょう日』（岩波書店）
○シャーロット・ゾロトウさく／モーリス・センダックえ・こだまともこ訳
『うさぎさんてつだってほしいの』（冨山房）
○小出正吾さく／山本忠敬え
『のろまなローラー』（福音館）
○ベッティーナ・ヒューリマン著・野村泫訳
『子どもの本の世界』（福音館）

（小田原女子短期大学）